体育授業づくり分科会

運動することが大好きな私ですが、ボールゲームには苦手意識がありました。それは、小学校の時のバスケットボールで感じたものでした。今日の勉強会を受けて、「分かるとできる」「できると楽しい」と言うことを感じました。ぜひ、学んだことを生かして、今もっている５年生の子どもたちにこの楽しさを伝えたいと思います。ありがとうございました。　（Ｎさん）

２０１０年　第２０回　学校体育研究同志会東京支部大会　体育授業づくり分科会

２０１０．８．２０・２１

体育の授業づくりにおける「わかる」「できる」と「人間関係」の学習過程

調布市国領小学校教諭　大貫耕一

提案1　ボールゲーム教材における「わかる・できる」と「人間関係」

１．授業実践研究の必要性

東京支部大会に、この「授業づくり分科会」ができて２年目となる。

同志会実践は、教えるべき内容としての「運動技術」と、学び方としての「グループ学習」が明確になっているため、実技を通すことで「教えるべき内容」「教え方」がわかりやすい。

一方、＜授業づくり＞は子どもたちと教師との創造によるたいへん個性的な営みであるため、実技で「教えるべき内容」と「教え方」がわかったから、授業づくりが上手にできるかというと、そうことは簡単ではない。

つまり、より質の高い授業づくりをめざそうとすれば、個性的な子どもたちと教師が共同で創造する「授業づくり」のための実践研究が必要になる。

２．子ども理解

授業づくりのための実践研究を行うと、「この子はどんな子？」という質問が必ず飛び交うこととなる。「教えるべき内容」と「教え方」がわかった後に、授業づくりを始めようとするとき、まず考えるべきは「子ども理解」だからである。

柴田は、スホムリンスキーの教育実践を紹介する中で、「良い教師」について次のように述べている。

「第１に、子どもを愛する人間、子どもとの交流に喜びを見いだし、どの子も良い人間になることができるのだと信じる人間、子どもと仲良くすることができ、子どもの喜びや悲しみを心で受けとめ、子どもの心を知っており、そして自分自身もまた子どもだったことを決して忘れない人間である。」（柴田義松「柴田義松教育著作集第８巻」ｐ．１７０学文社２０１０年）

実技を中心とした研究会ではほとんど出てこない「この子はどんな子？」という質問が、授業づくり研究の初めの一歩となるということ、それは授業によってすべての子どもたちに高まってほしいという「教師の願い」を教師自らが自覚することである。

３．結び合う体育

さて、子どもたちの高まりには、それぞれの教科のねらいが反映される。算数・数学や理科では「わかること」「考えること」などが。国語では「読むこと」「書くこと」などが。そして、体育では「わかる」「できる」こと共に「結び合う」ことがねらいとなる。

そう、体育という教科では次に示す山岡実践のように、子どもたちの「人間関係」が色濃く反映される。運動ができる・わかることをめぐって、子どもたちの「能力差」や「能力への考え方」が強烈にぶつかり合う。そして、体育の授業では自分や仲間への見方や人間関係が、変わっていく。

これほど強烈に人間関係が問われる教科は他にない。「わかる」「できる」「考える」と同等あるいはそれ以上に、「人間関係」の変容が実現していく教科が体育なのである。

（体育の背景にある運動文化やスポーツにおける文化特質の根幹には、「競争性」と「協同性」の関係があり、この「競争／協同」関係が人間関係に色濃く反映している。）

体育の授業づくり研究は、「学級づくり」などの人間関係づくりと重なっていく。

４．ボールゲームの教材価値

昨年度の提案である、体育における「わかる・できる」関係を、今回はボールゲーム領域を対象とした意図は、この「人間関係」にある。

ここで取り上げるボールゲームは、「得点を目的とした<集団>による攻防」をさす。（このため、テニスや卓球のシングルスゲームは想定されていない。）

南アWカップ決勝スペインーオランダの見事な攻防が思い起こされるが、「集団による攻防」を特質とするボールゲームにおける技術・戦術は「人間と人間の関係」によって成立している。

もちろん運動文化における技術・戦術の「人間と人間の関係」は、どの運動種目においてもあるし、「個人は集団を通してしか確立し得ないし、集団は個人の確立によってしか、意味を持ち得ない」と言われるように、学習ということ自体が「個人的性格のものであるとともに集団的性格のもの」である。（柴田義松「前掲書」ｐ．７３－７９学文社２０１０年）

このような運動文化や学習の本質を理解した上で、「集団による攻防」を特質とするボールゲームにおける技術・戦術には「人間と人間の関係」が色濃く刻印されているが故に教科内容としての価値を豊かに持っているのである。

もう少し具体的に言えば、ボールゲームにおける技術・戦術は、複数（２人以上）と複数の攻防関係によって成立しており、複数の人間における協同の技術・戦術と言い換えてもよい。そして、この協同関係には、運動能力差の協同のみならず、協同する人間同士の性格や価値観の違いまでもが反映されているのである。

小山は、中学体育バレーボール実践において、運動能力差の協同について次のように述べている。「バレー部員は最初適当にオーブントスを上げ、それにスパイクのタイミングが合わせられない初心者に不満を持つ。（中略）しかし、初心者の右肩前方○○センチ、高さ◇◇センチの位置に正確にふわりとしたトスを上げることができれば、スパイクを打たせることは可能である。そのトス技能は部活レベル以上に高い。」（小山吉明「中学体育教師の専門性とアイデンティティー」ｐ．３６体育科教育２０１０年９月号大修館）

引用文は、技術的な運動能力差の協同について記述されているが、実際の学習場面では、この絶妙のトスをスパイクする生徒の性格や価値観（たとえば勝敗をめぐるこだわりなど）も協同の対象となっている。

ボールゲームにおける技術・戦術学習では、このように運動能力差、性格、価値観などの協同関係が学習内容となっているのである。

報告1

私と子どもたち

わたしのクラスづくり

山岡真由美

教員になって6年目の私は、まだ日々の授業とともに、クラスづくりに悩むことも多いです。でも、子どもたちが友達と関わり合い成長することを何よりも強く願っています。そんな関係作りを目指して日々奮闘しています。

今年受け持った5年生は、素直でとてもかわいい子どもたちでしたが、気になることが二つありました。一つは、教師の言うことを全て大人しく聞き過ぎ自分の意見を言わないこと、もう一つは、Mくんと他の子たちに上下関係があることでした。学年の中でも一番体の大きなMくんは、自分勝手なところがあり、さらに時には手が出ることもあり、クラスの皆から恐れられていました。「Mに嫌なことをされた」と涙ながらに訴えに来る子どもたちに、話し合いをするよう勧めると、「あいつには1年生から何を言っても変わらなかった。言ったら痛い思いをするだけだよ」と一人がつぶやき、その言葉に皆深く頷くのでした。

そんなクラスの転機は、1学期のリレーと、2学期のフラッグフットの授業でした。リレーでは、意見を言えない子どもたちに変化が、フラッグフットではMくんを始めとして、子どもたちの関係に変化がみられました。

リレーの授業で変わったこと

リレーは初めは勝敗にこだわっていたのが、徐々にチームの記録を伸ばすことに熱中し始めました。そこで意見の相違でけんかをすることもありましたが、言い合った分記録を伸ばしたことで信頼関係が築かれたようでした。最後には「リレーは勝敗を決めるものではなく、いろいろな人とつながるためのものだ」というKくんの作文をもとに討論をしました。「でも勝敗は大事でしょう」と問う私に対して真っ先に反論したのは、いつもおとなしい女の子でした。結局、クラス皆が私に反論し、討論会は終わりました。子どもたちは自分の思いが強い時にははっきりと意見を言うのだと安心したと同時に、今までそのような機会や雰囲気をつくってこなかったことを反省しました。

フラッグフットに託した願い

一方Mくんに関してはリレーの授業を通して優しい面もみられましたが、いじわるは相変わらず続いていました。

リレーが終わると、徐々にクラスの雰囲気が悪くなってきました。週に1度のクラス遊びもなくなり、諍いが多くなり、Mくんのいじわるも増えました。

その悪い雰囲気を変えたくて、2学期には、夏の全国大会で教えていただいたフラッグフットに取り組むことにしました。しかし、子どもたちが3、4年生でやっていたフラッグフットと私のやりたかったフラッグフットにかなりの違いがあり、前途多難でした。作戦はいらないと言い張る子どもたちに最初は自由にやらせました。勝負にこだわるボール操作が上手な男の子が、ワンマンプレーでゲームを進めました。「勝ちたい。強い人だけでやった方が勝てる」というのが男の子の言い分でした。一方でボール操作があまり得意でない子はゲームに参加できない寂しさを抱えていました。得意な子、不得意な子、お互いの思いを分かり合える授業にしたいと思いました。行事続きで話し合いの時間がとれないなか、このお互いの思いをどうやって表面に出していくか…。結局、フラッグフットの後には必ず感想を書かせ、それをプリントにまとめて子どもに渡すことにしました。朝や帰りに時間がある時にはそれを見ながら話し合いました。すると子どもたちの意識が徐々に変わってきて、皆が楽しめるフラッグフットとはどういったものかを考えるようになりました。そのために、作戦も

立てるようになりました。

子どもたちの変化

でも本当に子どもたちが変わってきたのは、いつもは体育で目立たない女の子が何度かタッチダウンをした時からです。作戦次第で誰もがタッチダウンできる可能性があることを知ったのです。また、感想文からほとんどの子がタッチダウンしたいと願っていることもわかりました。そのうち各チームから「よし、今度は○○をタッチダウンさせる作戦を考えよう」という声が聞こえてきました。チーム練習も、ボール操作が苦手な女の子を中心に進めるようになりました。

そんな中でクラスで一番体育が苦手なTくんがタッチダウンを決めました。相手はMくんのチームです。見ていた私は、普段TくんをからかっているMくんが暴言を吐くのではないかと緊張しました。ところがMくんは悔しそうにねっころがると、次の瞬間笑顔で「Tにやられたぁ」と叫んだだけでした。試合後、Mくんが他のチームの友達に「Tがすごかったんだよ」と話すのを聞いて、周りも驚きながら「Tやったな」「Tすごいな」と彼を称えました。嬉しそうなTくんと、それを見て嬉しそうなチームのメンバー、悔しいはずのMくんのなぜか嬉しそうな顔。その時からクラスの雰囲気が一気に良くなりました。

Mくんにはさらに変化が見られました。クラスの中でMくんだけはずっと「女子はいらない。ワンマンプレーをしたい。」と、女の子を無視してプレーをしていました。しかし、その子が家で秘密の特訓をしていたことを知り、皆それぞれにうまくなりたいという思いをもっていることに気づかされたようでした。女の子をタッチダウンさせる作戦を立てるようになりました。練習中にも「上手になったな」と声をかけたり、試合で失敗しても「ドンマイ」と言えるようになりました。

そんなMくんの様子を見て、チームメイトのMくんを見る目が変わりました。クラス皆のMくんを見る目も変わりました。周りの目が変わったことで、Mくんもさらに成長し、周りのことを気づかえるようになってきました。

2学期末の子どもたちの感想には、クラスの皆が優しくなった、絆が深まったというものの他に、「Mが優しくなった」「Mのいじわるがなくなってよかった」という感想がありました。それは前に「あいつは変わらない」と言っていた子の感想でした。

そして3学期

今は3学期に入り、サッカーをしています。クラス皆で考えた目標は「全員がシュートできるサッカーにする」です。私が難しいと指摘をしても大丈夫と言い張る子どもたち。あれほどワンマンプレーだったMくんや男の子たちは、率先してゴールキーパーを務め、「今日はチームの皆がいい場所に動けて嬉しかった」と言うようになりました。女の子たちも「サッカーって楽しい」と元気に走りまわっています。体育の他にも、Mくんが提案して週に1度のクラス遊びが復活しました。Mくんはまだまだ自分勝手ですが、随分と周りに優しくなり、成長を感じます。

子どもたちが成長し、停滞していたクラスもやっと動き出しました。今は、友達と関わりあって学習し、友達の考えを知り、変化を見ることで子どもたちは変わるのだということを実感しています。そして、そういう変化が体育の授業では起こせるのだと思います。私にとって体育の授業は、子どもの願いを知るきっかけとなる、とても大事なものです。クラスの状態には浮き沈みがあり、時には子どもが育ったと思ったのは錯覚だったかな、と思うようなひどい状態の時もあります。それでも、これからも試行錯誤しながら、子どもにとって居心地のいいクラスをつくっていきたいと思っています。

（やまおか　まゆみ／東京・小山田小学校）